

した。その際、県庁の所在地が徳島であった上に、大坂越の険路に阻まれて県令の命令や指示が適時適切に行なわれず、鎮庄の為に多額の経費を要した。大坂越改修のため政府の補助金支給を陳情して西讃の暴動や行政上の不便を訴えたが、補助金はわずかに支出総額の四分の一に過ぎず、民費や寄付金でこの工事を完成した。

明治維新当初の一般地方人民の国家一政治に対する関心の強さを物語るよい史実であるが昭和三十八年、鳴門市北灘海岸を通ずる国道二八号線の改修によって八十年間の幹線道路としての機能を奪われるようになった。

**三好新道** 現在の一級国道三十二号線で本県に属する部分を一般に三好新道と呼んでいた。開設当時は多度津―池田―高知のこの道路を四国三県新道、あるいは四国新道と記されている。明治二十八年(一九〇五)には国道三十二号線、大正八年には国道二十三号線となり、昭和二十七年国道三十二号線と改称されている。三好新道は明治十九年(一九〇四)に起工し、総延長二百八十キロメートル、道幅五・五メートル、工費七十四万一千円を費して二十七年(一九〇六)に完成した。(吉野川・毎日新聞社) 徳島県統計書によると、明治二十年度から同二十六年度の間、四国連合新道開さく費として支出した県費の合計が十六万一千六百五円となっている。この道路は多度津―猪ノ鼻峠―箸蔵―大具渡―池田―白地渡―大歩危を経て高知に至り、香川、徳島―高知の三県を結ぶものである。三好新道の開設には山・川・峡谷の三大障害を克服しなければならなかった。すなわち、阿讃国境の讃岐山脈を横断する猪ノ鼻峠、吉野川の横断と大歩危・小歩危の険の開さく、四国山地の横断である。旧道は大歩危の険を避けて下名から根津木峠、白川口へ出るか、高知県本山町川口から笹か峰を越えて愛媛県新宮村へ出ていた。新道は吉野川の河岸に沿って歩危の崖壁を切り開き、徳島県と高知県を結んだ。しかし、さらに困難な工事は架橋であり、未解決のまま残された。大具渡は昭和三十五年(一九六〇)十二月六日三好大橋の開通まで、白地の渡は昭和二年(一九一七)五月三好橋の完成までこの道路最大の障害となっていた。伊予川では嘉永七年(一八二六)四月す

に仮屋高橋がかけられており(三好郡誌) 明治二十六年(一九一三)三月には伊予川橋の架替が行なわれている。鉄橋の川口橋ができたのは明治三十八年(一九〇五)三月で四千三百九十六円の工費を要した。この橋は徳島市の新町橋について県下で第二番目に作られた鉄橋である。

三好新道の開設に努力し、偉大な功績を残した人は大久保謙之丞と武田覚三である。大久保謙之丞は香川県三豊郡財田村の素封家に生まれ、この新道開さくのために東奔西走したが、その完成を見ずして永眠した。武田覚三は美馬郡猪尻村出身で、明治十二年(一九〇六)三好郡役所書記となり、三年後に郡長に昇進して、大久保等とともに新道開設を推進した。

**その他の道路** 清水越は明治三十五年(一九〇二)以降県道に編入されて逐次改修せられ、伊予街道は同三十二年改修に着手し三十五年に竣工した。また、土佐街道は明治二十八年(一九〇五)から数次に区分して改修工事が行なわれたが、その完成は他の主要街道にくらべると非常に遅れた。この街道の徳島―桑野間三〇キロメートルは、明治十五年(一九〇二)までに一応車道に改修する工事が完成したが、桑野以南の車道化は遅々として進まず、徳島・穴喰間が車道で結ばれるようになったのは大正十一年(一九二二)四月である。

### (三) その他の主要道路の改修

**木頭街道** 明治三十年(一九〇七)に起工し、大正十一年(一九二二)四月に平谷まで車道を通じた。

**木屋平街道** 麻植郡が郡費をもって明治三十二年(一九〇九)に剣山街道の名で起工し、同三十九年(一九〇六)に竣工した。(徳島県郷土史) 美馬郡誌によると穴吹―麻植郡境の間三十九キロメートルの改修は明治三十六年五月に着工し、同四十五年(一九二二)三月に竣工している。